

赤間神宮

唐戸市場から少し東に行ったところにある赤間神宮の印象的な赤い鳥居は、下関のランドマークである。現在の社殿は第二次世界大戦後（1939～1945年）に建てられたものだが、赤間神宮の歴史は何世紀も前に遡り、仏教と神道の両方の伝統を包含している。

伝承によると859年まで遡り、僧の行教がこの地に八幡神を祀る祠を建てたという。壇ノ浦の戦いで幼帝・安徳天皇（1178～1185年）が悲劇的な最期を遂げた後、赤間神宮は安徳帝と永遠にゆかりのある神社となり、何世紀も後になって、安徳天皇が眠る場所として正式に認定された。

仏教の信仰においては、崩御された天皇の御魂が報復を求め怨霊となって戻って来ることがないように鎮めることが必要とされた。1191年、安徳が溺死した湾を見下ろす寺に供養堂が建てられ、安徳の霊を鎮める儀式が行われた。阿弥陀寺と呼ばれるその寺は、その6年前、安徳とともに亡くなった数千人の武士のために建てられたものだったと考えられている。

安徳帝の母の乳母であったとされる尼僧メア（生没年不詳）が、安徳天皇の鎮魂の儀式を手伝った。おそらく彼女は、幼い天皇の祖母で、安徳帝とともに波に飛び込んだ二位の尼（平時子、1126-1185）の言葉に触発されたのだろう。壇の浦で彼女の一族の滅亡が明らかになったとき、二位の尼は「男達の霊のために儀式を行うことができるよう、女達が助かることを願っている」と言ったと記録されている。

数世紀後、明治時代（1868-1912）になると、神仏習合は正式に分離され、阿弥陀寺は神社に分類され、赤間宮と名付けられた。1940年、赤間宮は最高位の神社として赤間神宮となった。そして1945年7月2日未明、アメリカのB29爆撃機が下関に焼夷弾を投下し、神社は火災で焼失した。赤間神宮が再建されたのは1965年である。

注目すべき建造物

赤間神宮への入り口は、真っ赤な上層階ついたアーチ型の水天門を通ったところにある。注目すべき社殿には、外拝殿（げはいでん）と内拝殿（ないはいでん）がある。後者には浅い池が設けられており、伝説の海底宮殿「龍宮城」にちなんでいる。二位の尼は波の中に飛び込んでいく際、幼帝を安心させるため自分達は伝説の宮殿を訪れるのだと説いたと言われている。御本殿の西方には、安徳天皇の陵墓である阿弥陀寺陵（あみだじのみささぎ）がある。

耳なし芳一

赤間神宮は、平家落人の亡霊に耳を奪われたという琵琶法師、芳一の怪談の起源である。この物語は、ラフカディオ・ハーン（1850-1904）の『怪談』（1904年）で広められた。宝物殿の裏手

には、防府出身の地元の作家・押田政夫（1920-2008）作の楠でできた表情豊かな芳一の彫像が祀られている。

先帝祭

毎年5月2日から4日にかけて、安徳天皇を祀る祭礼が開催される。しものせき海峡祭りの一部で、遊女のような身なりをした女性達が稚児達や彼女達の警護役に扮した男達を従えて行列を作るのが特徴である。この行列は、戦いを生き延びた12世紀の遊女たちを称えるもので、彼女達は安徳の陵墓に花を供えるために毎年訪れていたと言われている。